

## 義経と頼朝そして兄弟たち

義経は頼朝に嫌われついには敵対し、殺されます。

可哀そうな義経で後世判官びいきの言葉が出来ました。歴史学者は義経の政治音痴を指摘します。

義経は親の義朝の末子九男で、九郎義経と称します。

八男説もあります。叔父の鎮西八郎為朝が不幸な最後だったので八郎の名を避けたと言うのです・

9人も子があれば当時一人ぐらいは幼児で死亡するのが普通ですので、まあここでは九男説を取りましょう。

頼朝・義経の源家は前九年・後三年の役で大功あった頼家・義家の流れをくむ武家源氏の本流です（別に公家源氏もあります）。

父親の義朝は平清盛に平治の乱で敗れ、味方に謀殺され子供たちは清盛に裁断されます。

平治の乱に父と共に参戦した長男の悪源太義平は清盛に捕らえられ刑死、次男朝長は戦死です。参戦しなかった三男頼朝以下は未だ幼いとして処刑されず一命を取り留めました。

頼朝は伊豆へ配流され、四男は幼少で死亡、五男範頼は遠江国蒲御厨<sup>がまみくりや</sup>で生まれ育ち、六男全成（今若）は醍醐寺坊官にされ、七男義円（乙若）は天王寺の坊官にされ、そして義経（牛若）は鞍馬寺に預けられます。

五男範頼、六男全成、七男義円の一生は後述します。

先ず義経と頼朝と関係です。

義経（牛若）は1159年（文治元年）の誕生で、父義朝が殺された翌年の1160年の時は2歳でした。

母親の常盤は今若、乙若、牛若（義経）を抱え清盛に捕まります。

清盛の妾になった後、公家の藤原長成と再婚させられます。兄の今若と乙若は坊官にさせられ、牛若は6歳まで再婚先で育てられ、後は鞍馬寺<sup>くらまでら</sup>へ預けさせられました。

牛若は鞍馬寺での稚児名を<sup>しやなおう</sup>遮那王と名付けられます。

遮那王（牛若一義経）は16歳の時に奥州平泉の藤原<sup>ひでひら</sup>秀衡を頼って鞍馬寺を脱出します。

秀衡は奥州の実質支配者です。

秀衡の保護の下で兄頼朝の立ち上げまでの5年間を過ごします。

これは史実です。

しかし幼児から鞍馬寺の少年時代、奥州での青年時代についての生活、活動については史実としては残っていません。

この空白時代は<sup>ぎけいき</sup>義経記などの物語に詳しいところです。

頼朝が平家に立ち上がった時、義経は秀衡に馳せ参じたいと申し出ました。しかし秀衡は反対します。

秀衡は平氏とも源氏とも中立の位置にいたかったのでしょう。秀衡は奥州が支配できれば良いのです。

奥州藤原氏が味方になって援軍を出してくれない義経は単独で頼朝の下に行こうとします。それでも秀衡は自分の家人から二人だけつけてくれました。佐藤継信・忠信兄弟です。義経の直の家来は弁慶と伊勢三郎がいますが、領地を持った騎馬侍は兄弟二人だけです（侍は郎党を従えます）。

義経は騎馬侍2騎と郎従（兵卒）十数名で頼朝の下に参じました。

頼朝は兄弟が馳せ参じてくれたことはいうれしかったでしょうが、侍が馳せ参じることとは何十騎、何百騎の勢力をもって来ることです。

戦力の役にたちません。

それでも頼朝は自分の下に義経を置きました。

それから3年義経の役が出てきました。

木曾義仲、平家追討で本来は頼朝が征西するべきところを、味方の関東の武士たちが、自分たちだけで行くので御大将の頼朝は鎌倉に残って欲しいと。

彼らの表向きの理由は奥州藤原氏の動きが見えないことで、頼朝留守中に南下の恐れもあることです。もう一つの理由は頼朝が勝利すればそのまま京に居すわることがあり得ることで、そうなれば関東の武士たちは見放されないかとの恐れです。

この引き留めに対し、頼朝は弟の範頼と義経を自分の代官として起用することにします。

範頼が総大将格で、義経は副大将格です。

もちろん二人には梶原景時、小山朝政等名だたる侍が参謀につきます。

そして義経は義仲追討、平家せん滅で格段の手柄を立てます。

それであるのに義経がなぜ頼朝に嫌われ、殺されなくてはならなかったのかを調べましょう。

一つ目、一の谷での平家の合戦で源氏軍は平家軍に勝ち、義経が京に戻ったところで頼朝は朝廷に戦勝功労者に官位を朝廷に推挙しました。

義経の兄で頼朝の弟の範頼は三河守に推挙されましたが、義経にはありません。

しかし白河法皇は義経に<sup>けびいしじょう</sup>検非違使尉に任官させます。義経は兄の許しを得ず任官します。頼朝は激怒します。

頼朝としては木曾義仲追討も、一の谷合戦での源氏軍勝利も頼朝代官で総大将である範頼の功績と見、義経は奇襲で戦功があったとはいえ副大将格であった故推挙を見送ったのでしょう。

二つ目は壇ノ浦の合戦で勝った後、義経は頼朝の許可なく戦場を離れ京へ凱旋します。

三つめは京に凱旋した義経は戦犯の平 時忠の娘を、頼朝の許可なく妻にします。そして時忠を保護します。

四つ目は頼朝は屋島の合戦は合戦の指令は出しましたが、壇の浦に義経出征は命じていない。これについては異論があるでしょう。有力武将の梶原景時や和田義盛（範頼もか）参戦しているので義経の勝手な戦いと言えないかもしれません。

とにもかくにも頼朝は義経の京への凱旋後義経を勘当します。

義経は言い訳のため鎌倉へ向かいますが、相模の<sup>きこう</sup>酒匂（小田原あたり）で鎌倉よりの指示で止められ、出張ってきた北条時政に捕虜の平 宗盛を引き渡し、軍勢は鎌倉に引き取られます。義経は鎌倉手前の腰越でかの有名な腰越状を出して無実を訴えますが、許されず、京に戻ります。

頼朝は何故ここまで強固に許さなかったのかです。

頼朝は平家をせん滅し、代わって関東武士を糾合して頼朝政権を立てることが目標です。

この権力得るには平家に勝つことだけではなく、後白河法皇より政権、特に関東地方の政権を認めさせることが大事なのです。

後白河法皇は自力を温存させるため頼朝一強を避け、木曾義仲を対抗馬にしようとし失敗します。

そこに義経が現れました。

頼朝の推挙なく官位を後白河から受けることは、頼朝より半独立で、後白河の家人のようになり、先々木曾義仲のような頼朝の対抗馬になり得ます。

頼朝は義経だけでなく一門、家人すべてに頼朝の推挙なしに官位を受けることを厳禁しています。

頼朝は関東の武士の協力で政権を打ち立てようとしています。この協力関係では有力武士団との連合政権になってしまいます。頼朝は自分の政権樹立のため傘下の武士の御家人（家来）化を計ります。

その政策の最も大事なのが御家人と朝廷（後白河）の直接の関係の禁止です。御家人の主人は頼朝ただ一人です。朝廷の家来になってはいけません。二股も許しません。頼朝政権の樹立を整備していきます。

又頼朝は第2の木曾義仲の出現に神経質になっていることもあります。

義経は兄の政治感覚が分かりませんでした。

その外に問題もあります。

戦時での作戦遂行にあたり頼朝に事前の状況報告が少なく、相談をしません。兄の同じく代官の範頼は詳しく頻繁に報告し指示を仰ぎます。

兄から付けられている参謀（梶原景時）の意見を聞きません。有力御家人の梶原を政権内で敵に廻してしまいます。

いずれの作戦も義経が先頭の奇襲作戦で、自分の戦功を優先していると思われます。大将は中軍にいて部下が先陣で手柄を立てさせるようにするのが当時の戦場の倣いです。

武士は独立の領主です。みんな手柄を立てて領地を新たにもらうために戦うのです。

義経は指揮官としては優秀で京では人気がありましたが、意外に配下の武士たちから人気がありませんでした。

故に頼朝に反乱して京で立ち上がった時に数百人しか兵が集まりませんでした。

義経は政治感覚がほとんどない故に殺されざるを得なかったというのが今日の研究者の結論になります。

それではここで頼朝が立ち上がった時に馳せ参じた義経以外の弟たちのその後です。

五男の<sup>まれよし</sup>希義は土佐に配流されていました。頼朝が立ち上がった時に土佐で立ち上がりましたが、清盛の家人に殺されました。

七男全成（今若、義経の同母兄）は醍醐寺の坊官にされていましたが、頼朝に馳せ参じ、頼朝に無事使えましたが、頼朝亡き後、二代目頼家に謀反の罪で殺されました。

八男義円（乙若、義経の同母兄）は天王寺の坊官にされていましたが、源行家（頼朝の叔父）の軍に参軍し、墨俣川で平家相手に戦死します。

九男は義経です。

義経の兄で五男、同じく頼朝代官<sup>のりより</sup>範頼です。

遠江国蒲御厨で生まれ育ちました。

猜疑心の強い兄の心情を察し作戦遂行に当たってはいちいち指示を仰ぎ、付けられた参謀の意見もよく聞きました。

頼朝に推挙され任官した三河守も兄におもんぱかってその後辞任します。

鎌倉の御家人の間では評判の良い人でした。兄の対抗勢力にならないように気を使っていました。

これぐらい兄に気を使っても義経の後に兄より粛清されました。

頼朝は対抗馬になりそうな兄弟二人をさんざん利用した後殺します。

頼朝の兄弟の家系は鎌倉時代に途絶えます。

頼朝の家系も長男頼家、次男実朝で途絶えます。

偉大なる政治家頼朝と偉大なる戦術家義経とその兄弟たちの栄光は平氏と同じく盛者必衰のことはりをあらはしたのでしょうか。

以上

2024年3月14日

梅 一声

義経の兄弟系図

